

ふつうって何だろう？ みんなで考えてみよう！

私たちは、ふだんの生活の中で、「ふつう」という言葉をあまり意識せずに使っています。でも、よく考えてみると、「ふつうの人」とは誰のことなのでしょう？ 「ふつうの場合は」ってどんな場合なのでしょう？

たぶん、私たちは何か「特別なこと」や少数派に対して「ふつう」という言葉を使っているのかもしれませんが、「ふつうの人」はみんな同じ人ではなく、やはり1人1人違うはず。そんなことをワークショップを通して感じてみようというのが今回の研究会でした。

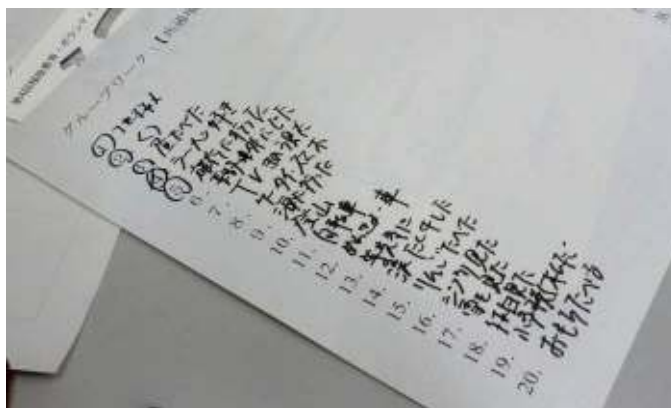
講師に信州大学教育学部伏木久始先生をお招きし、先生が日頃関わっていらっしゃる学校や子どもたちの例を話していただきながら、心と体を動かしました。

集まったのは学校の先生をはじめ、住民自治協議会の関係者や施設・行政の職員など。

最初はウォーミングアップ。グループ（5～6人）の中で、互いの共通点を探します。グループ



「今日車で来た人！」
共通点をさがしていきます



によって20以上みつけるグループもあれば、10がやっとというところもあり。視点を広く柔軟にもつことが共通点をさがすのに有効なようです。

続いて、自分の周りの人たちについて「やりたいことが見つからないようで、何事にも『無気力』『無関心』『自分が悪いのに、注意のし方が気に入らないと逆ギレする』など五つのタイプの人の割合を各自表に記入していきます。グループの中で全員の答えが合ったところはほとんどありませんでした。その人の周辺環境もありますが、人それぞれ感じ方の違いも認識できます。

	1	2	3	4	5
シヨツ	40	20	20	40	20
ムオ	0	0	0	20	20
ミレ	0	40	20	40	60
クス	20	20	20	40	20
カズ	20	0	60	40	80

全員が同じ答えにはならないのが大切です

伏木先生は、「人は自分を「ふつう」に所属していると安心という気持ちがある。でも、集団の中で『ふつう』を疑う勇気も必要」と言います。さらに、「私たちはそこにある情報と自分の過去の経験

から物事を判断する。過去の経験はそれぞれ違うのだから、本質を誤認することがあたり前だということが原則」とも。



次は、各自がグループのみなさんに自分の経験を三つ話すのですが、そのうち一つはウソを混ぜます。グループの人たちはそのウソを当てる、というもの。ウソを見破られないようにするには、できるだけ他の人とは違う経験、いろいろな経験を自分の過去から掘り起こす必要があります。その結果、みなさんの体験談は本当に個性的なおもしろいものになります。そして、人は一人一人誰とも違う「私」なのだということが実感できます。

つまり、これだけ人とは違う「私」を「ふつう」と思い込むことは偏見や差別につながると伏木先生。裏を返せば「ふつう」の中にいると、何か課題を抱えていても気づいてもらえないという可能性も。

伏木先生は、私たちが「ふつう」と思っていることが実は違うという事例もたくさん出してくださいました。「子どもたちが集団登校すること」「漢字とひらがなとカタカナを読み書きできること」「ほとんどの学校に体育館とプールがあること」など日本の長野にずっと暮らしていると疑問に思わないことが実はもっと大きな枠で見ると少数派で、「ふつう」ではないかもしれないということです。

最後に、伏木先生からのメッセージ。

- ♥ つねに自分を見ているもう1人の自分をもとう
- ♥ 私たちの見方には限界があることを知り、他者に対して尊敬の心を持って接することが大切
- ♥ あなた自身も「ふつう」な人ではなく、他の誰とも違うスペシャルな存在。だから、いつも自分らしくありたい



短い時間でしたが、とても密度が濃く、楽しい時間となりました。